

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、
どのように保障しているか

②分散会

I. はじめに

討議課題をもとに討議の柱を立て、「仲間づくり、集団づくりの取組を通して、子どもや集団がどう変わり、どんな展望が持てたのか、また、教職員の立ち位置や生き方がどのように変わっていったのかについて明らかにしよう」と提起した後、報告・討論に入った。

II. 報告および質疑討論の概要

—報告1—⑦

弟や妹も学習会へ行かせたい (熊本県人教)

—主な質疑と応答—

香川 学習会とはどんなものなのか。参加者は何人くらいいるのか。

報告者 学校の子どもたち全員が町民センターの学習会へ参加している。基礎学習や縦割り班での学習などを行っている。今はムラの子はいないけれど、どんな思いで町民センターができたのか、学習会が行われてきたのかは子どもたちに伝えていきたい。また、子どもたちの願いを受け止めながら、長いスタンスで仲間づくりを進めたいと思っている。

兵庫 今はムラの子はいないということだが、高齢化でいなくなったのか、それともムラを出て行ってしまったのか。

報告者 今でもムラに残っている子もいるが、高校を卒業したらほとんどの子は仕事で県外などに出ていく。だからこそ学習会に参加している子どもたちに、当時の活動にかかわった人の話を聞かせる取組を行い、自分ごととしてとらえられるようにしている。

大分 3、4年生の活動は見たが、高学年の活動はどうなっているのか。

報告者 町の学校で共通教材をつくりみんなで作っている。5年生は水俣の学習、6年生は修学旅行に向けた平和学習を行っている。当事者と出会わせることも行っている。

福岡 学習会でやっていることを次にどうつなげていくか。いかにそれを学級の中につなげていくかという点にこだわっていくことも大切だと思う。また、若い先生にもしっかり伝えてほしい。

神奈川 学習を広げていったときに、その中に被差別の当事者がいたときにはどのようにその子

の思いと向き合っているのか。

東京 実践では、常にその集団の中に当事者がいるかもしれないと思ってやっていたらなければならないと思う。また、人と出会わせていくことも大事にしていきたい。その中で厳しい思いをしている子が立ち上がっていくと思う。

—報告2—②

みんなが笑顔になる学校をめざして

(香川県人教)

—主な質疑と意見—

大分 社会的立場の自覚はどのように行われているのか。

報告者 20年以上前から行われている。子どもの実態を見て保護者が告げている。「何で学習会にきているの」など子どもたちからの疑問が出た時のタイミングを大事にしている。その際に担任や学力・支援担当教員も立ち会っている。子どもたちが差別に負けず、胸を張って生きることができるようという考えで話している。

大阪 日常での仲間づくりはどのようなことを行っているのか。

報告者 「ほめカ」の取組。お互いのことを考えられる、認め合える子どもたちを育てたいと考えている。

神奈川 あきらさんに立場を告げた時にあきらさんが落ち込んだという話があったが、そのときに報告者はどんな立ち位置でかかわったのか。

報告者 あきらさんとは今でも話をしているが、その時の気持ちや思いはきちんと聞きとれていない。かかわり続けていきたいと思っている。

兵庫 あきらさんが何にショックを受けたのかはきちんと聞きとってほしい。正しいことを正しく知って、正しく伝える、そして正しく出会わせていく取組を大事にしてほしい。胸を張れるムラのすばらしさをきちんと伝えてほしい。

協力者 胸を張れる部分を伝えても、将来心が揺らぐ時があるかもしれない。その時にその子をどう支えるのか。その時に大事になってくるのが仲間づくりだと思う。どのように仲間づくりを進めていくかは総括討論の話題としたい。

—報告3—④

命どう宝～沖縄戦の学習から平和や命について考える～

(大阪市人教)

—主な質疑と応答—

京都 子どもは授業だけで変わるのではない。他にはどんな取組をしているのか。

報告者 子どもたちとの毎日のかかわりの中で、教師と子どももつながるように普段からのかかわりづくりを大事にしている。子どもの話を丁寧に聞くこと、家庭訪問に行き子どもの様子を知ること、頑張っていることがあれば保護者に連絡することなどを心がけている。

大阪 サキにはどのような変容があったのか。どのようなかかわり続けているのか。

報告者 家庭の不安を訴えることが少なくなっ

た。今でも調子がいい時と悪い時どちらもあるが、調子がいい時が長く続いているときほど話しかけるようにしている。場合によっては、保護者と本人をつなげるように動いたこともある。

石川 実際の生活課題と学習のマッチングは。

報告者 コウタは家庭生活の中で自分の身の危険を感じたり、不安な気持ちになったりすることが多くあった。そのため、自分の命を軽視するような発言があった。だからこそ、自分自身が沖縄で学んだ命の大切さを子どもたちに語り、少しでも自分のことを好きになってほしいと考えてこの実践につなげた。

石川 学習後のコウタの変容は？

報告者 他の子どもに悩みを相談する姿が見られた。相談された子は、コウタとのつながりができ、話ができるようになったことを喜んでいる。コウタの不安は今でもしっかり聞くようにしているが、その中で「将来アルバイトがしたい」などの前向きな発言も出るようになった。

—報告4—③

いま外文研の生徒たちに起こっていること

(東京都同教)

—主な質疑と意見—

神奈川 この取組の核心は何なのか。

報告者 民族名で生きるということは、自分の生き方を自分で選んでいくことにつながると考えている。自分自身を隠さずに、差別に立ち向かう力をつけていきたい。

東京 差別をする側に対してはどんな取組をしているのか。

報告者 人権教育講演会などを通して全員で人権について考える機会を設けている。当事者以外の人にも考えさせていくことが大切だと思う。

京都 報告者の考える差別とは何か。

報告者 一番大事だと思っているものをダメなものとして貶めてしまうことが差別だと思っている。

新潟 今までの活動で足りなかったと思っていることは何か。

報告者 名前を戻せなかったという事実から、その問題について考えさせていなかったことが足りなかったことだと考えている。

Ⅲ. 総括討論およびまとめ

総括討論のなかでは、ムラ、オキナワ、外国、性など、自分のルーツ、生い立ちを見つめ、語り合い、交流する中で、しんどい立場、マイノリティの子どもたちと、その子どもたちのカミングアウトを受け止める仲間とのつながりや絆を深めること、つまり、支える人間関係の構築の必要性や居場所づくりの大切さが語られた。仲間づくりは子どもどうしだけではなく、教職員集団、保護者、地域の方々、すべての人々がつながることが大切である。また、私たち自身が、子どもや保護者に向き合う中でどういった立場で接して、その

なかでどのように自分を変容していくのか、自分の立ち位置を確認して取り組むことの大切さが語られた。

Ⅳ. おわりに

報告には、実践者と子どもたち、保護者、地域、先輩などとの「確かな出会い」があった。その出会で「魂と魂がぶつかりあい」、心が揺れ、情熱が生まれていた。「感動」する中で、「人間が変革」していく姿があった。各地域での取組や推進体制などには違いはあったが、どの取組にも差別をなくすためには「かかわり続ける必要がある」ということを確認することができた。今大会で得たエネルギーを、そして課題を各地に持ち帰り、明日からの実践につなげていきたい。